

## 市長記者会見記録

日時：2017年 6月20日（火）14時01分～14時30分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：市政一般

### <内容>

#### <<幼稚園児の死亡事例について①>>

**司会：** ただいまより市長記者会見を始めます。本日は、市政一般となっております。

それでは、福田市長、ご登壇お願いいたします。質疑の進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

**市長：** よろしく申し上げます。

**幹事社：** 幹事社です。よろしくお願いいたします。

**市長：** お願いします。

**幹事社：** 今日には市政一般だけということで。今月に入って、大師幼稚園のほうで園児が立て続けに亡くなられたということで、今の時点では強い感染につながるようなウイルスとか、そういったものは発見されていないということなんですけれども、市長の見解と今後の対応について、方針をお話しただけたらと思います。

**市長：** まず、相次いで幼いお子さんが亡くなられたということでして、まずはほんとうに突然のことだったと思いますので、ご遺族、関係者の皆様のお気持ちを察すると、ほんとうにご心痛いかばかりかと思えます。改めてお悔やみを申し上げたいと思えます。

これまで、この事象の発生からたびたび皆さんの前で会見をさせていただいておりますので、それを繰り返すことはありませんが、引き続き、園の皆さんも大変ご協力をいただいておりますし、また今後についても、警察でありますとか、あるいは市の関係部署、それから厚生省、国立感染症研究所ですか、こういった関係機関とより密に連絡をとって取り組みを進めていきたいと思っています。

**幹事社：** 今、警察とも連携というふうにおっしゃいましたけれども、やっぱりまだ事件性での側面というものも視野に入って話を進められているのでしょうか。

**市長：** いや、それは私は存じ上げません。

**幹事社：** わかりました。原因がわからないということで、住民の方とか保護者の方でも結構不安が広がっているというところもあって、今回、研究所のほうで原因がわ

からなかったということで、それで終わりにするんじゃなくて、徹底的に究明してほしいという保護者の声もあるんですけども、それについて何かありますでしょうか。

**市長：** 引き続き、国立感染研ですか、あるいは、調査ということはしていくんだと思うんですが、どこまでそれが解明できるかというのは、今の現時点で何にも言えないので、私どもとすれば、不安を、これまでも強い感染力を持ったものではないというふうなことまでは言えています。園の再開だとか、そういったことに向けて、あるいは周辺の皆さんの不安だとかというのを払拭すべく、適切な助言だとか、あるいは情報共有はさせていただきたいと思っております。

**幹事社：** ありがとうございます。各社、お願いします。

### 《ヘイトスピーチについて》

**記者：** すいません。せんだっての文教委員会で、ヘイトスピーチのガイドライン案のより具体的なものが示されて、20日、今日からパブリックコメントということになっていると思います。たてつけは非常によくわかって、憲法と抵触しないことを考えつつ、人権被害をいかに守るかということの苦難のほどがうかがえます。

一方で、市長もご案内と思うんですが、既に昨年6月5日に中原でデモを主催した男性が、再び、近く川崎市内でデモを予定しているやに灰聞しております。ガイドラインができるのは11月、施行されるのは来年3月ということで、それを前にして、市内でヘイトになる可能性のあるデモが行われることになると思いますが、この場合、申請が出されたときに、川崎市としては、どういった基準に基づいて、許可、不許可の判断を決めていかれるのか、現段階でのお考えを聞かせてください。

**市長：** 現在のそれぞれの施設の管理条例というのがございますので、それに基づいての個別の判断になろうかと思えます。ですから、何か危険があるとか、あるいは、そういったヘイトスピーチが明らかに行われる蓋然性が高いとか、そういったことがわかれば、これまでどおりの対応をしていくということになると思います。

**記者：** ガイドラインはまだ案の段階で、パブコメがかかっている状況ですけども、ガイドラインの考え方に準拠して、許可、不許可を判断していくという理解でよろしいでしょうか。

**市長：** そうですね、はい。

**幹事社：** ほか、よろしいでしょうか。

## 《幼稚園児の死亡事例について②》

**記者：** 感染症の件なんですけれども、今の時点では強い感染が疑われるようなものは検出されていないということで、初めの市の情報の出し方というのは適切だったとお考えなのか。というのも、当然、園周辺の保護者の方も含めて、ああいう公表をしたことで、市全体が、もしくは広域的にも不安を感じる方がいらっしまったということもありますけれども、その辺、今振り返って、市長どのようにお考えか。

**市長：** 適切な情報提供の仕方だったのではないかと私は理解しております。

**記者：** 例えば、確かにお二人の方が相次いで亡くなったという時点で、何らかの伝染するものが原因だったのではないかと疑わざるを得ないという市のお立場はわかるんですが、仮にもっと強い感染力があるものだとすれば、その期間の間に2人で済まなかったんじゃないかという気もしますし、確かに感染症の可能性はあるけれども、そうでない可能性ももちろんあるんだよということは、何か一番初めの公表のタイミングで、もうちょっとアナウンスできなかったものなのかということを思ったりもしたんですが、その辺はどうでしょうか。

**市長：** もう一度、言っていただいてもいいですか。よく理解できなかったのです。

**記者：** つまり、感染症の疑いがある、との可能性もあると見て調査をされる形で一番初めに公表されましたけれども、もちろん、当然そうではないんだと、そうではない可能性ももちろんあるというメッセージを、どれだけ市が打ち出せていたのかなということをちょっと思ったもので、そういうものも同時に何らかの形で伝えるということも手としてはあったのではないかとも思ったんですが。

**市長：** 要するに、感染症ではない可能性もありますよということを、より強く打ち出すべきだったのではないかというお話ですか。

**記者：** より強く打ち出すかどうかは別として、そういうことをアナウンスするというのはあったのではないかと思ったんですが。

**市長：** 知り得ている情報を適切に、混乱させることなくお伝えするというのが私どもの趣旨で、情報提供というか会見をさせていただいておりましたし、これからもそうでなければならぬと思いますので、そういった意味では、情報の出し方に不手際があったとは、私は理解しておりません。

**記者：** わかりました。

**記者：** もう一点、今の幼稚園児の件なんですけれども、今回、情報の流れとしては、それぞれのお子さんをご自宅で急変されて、川崎消防が川崎市立病院にお二人とも搬

送しています。川崎市立病院から、法律に基づいて川崎警察署に異状死の届が提出されています。川崎警察署から川崎区役所のほうに、こういう事案があるというぐあいに情報提供がなされ、その情報が健康福祉局の感染症対策の関連の部署のところにもたらされたというのが流れです。これは市長もご承知だと思います。

結果として、12日、お二人目の方が亡くなられた段階で、その日のうちに情報がそのルートをするっと回っているのですが、遅滞はなかったとは思いますが、これは老人施設の連続転落死の事故のときに、部局を超えた情報共有ということが検討されて、その際には、健康福祉局と消防局が情報をより緊密に連携していくという確認がされて、実際に運用されています。

今回も県警を通して、県警のほうは義務として提供したのではなくて、こういうことがあるのでということで情報提供しているんですけども、市の消防が、救急が運んでいて、市立病院で診察しているにもかかわらず、そこからダイレクトに健康福祉局、ないしは区役所に来ないのが、ちょっと個人的には残念だったなというぐあいには思いますが、結果論として、遅滞なく情報が回ったんですけども、こうしたケースでも、より緊密な各局間の情報共有を進めるべきだと思いますけれども、いかがでしょうか。

**市長：** それは、あらゆるルートがあっただけいいんじゃないかと思います。それぞれ個人情報のお話もあるのかもしれませんが、しかし、もしこういった感染症と同じ、どこまでそこに気づけるかということが問題なんですけれども、より緊密に連携していく必要があると思います。

**記者：** 市長がおっしゃっているのは、例えば川崎消防とか、市立川崎病院がそういう状況を知ったときに、健康福祉局とか、あるいは川崎区の保健福祉センターだとか、そういうところに情報が行くルートも検討してもいいんじゃないのかということですかね。

**市長：** ちょっとそれは、どういうやり方でやるのが一番いいのかというのは、改めて検証を落ちついてさせていただきたいと思えますけれども。そうですね、検証させていただきたいと思えます。その上で、どういうのがほんとうに適切なのかということだと思います。

**記者：** 先ほどの記者さんの質問と若干重なるんですけども、要するに、今回、今のところ結果としてですけども、感染症の蓋然性が比較的低いという状況になっていますが、例えばこれが猛威を振るうような形の感染症だった場合に、川崎市本庁の健康福祉局が前のめりになって動く必要があったと思えます。そうすると、今回はた

またま情報がスムーズに流れましたけれども、よりダイレクトに行ったほうがいいのかと思いますか。

**市長：** おそらく、私もこの分野のプロではないので、ただ感染症の、例えば新型インフルエンザみたいなものが発生したときは、わざわざ警察の連絡を待つべきものでは全くありませんから、直接、例えば医療機関から情報が上がってくるという仕組みになっていますし、そういうふうな対応になると思います。ですから、こういう、確率論からいうともものすごい、ちょっと考えられないような事案だったケースだというふうには思います。

**記者：** 一応、今回のことを踏まえて、情報の伝達がどうあるべきか、各局間の連携がどうあるべきかということは、今後検証されていくという理解でよろしいですか。

**市長：** そうですね、こういった事案があるたびに、どういうものがほんとうによかったのかというのは、絶えず検証する必要があると思いますので、一般論としてそうだと思います。

**幹事社：** ほか、ありますでしょうか。

**記者：** 幼稚園の関係で、先ほどの質問と絡むんですけれども、たしか最初の水曜日ですかね、会見、夜されたときも、昼ぐらいには結構地元だと、ママ友同士のLINEがすごく飛び交って大変な騒ぎになっていてという、どこどこ小学校でも死んだんじゃないかとかという話が飛び交っていたやに聞いているんですけど、坂元医務監なんか会見でもおっしゃっていましたが、ちょっと危険なガセの情報も飛び交っていて非常に危険な、あそこに近づくなとかという、下手すると偏見とか、何かいろんなものを生んでしまうような、感染症だと、どうしてもそういうふうなものと絡んでしまうのはわかるんですけど、リスクコミュニケーションというんでしょうか、情報を一元化して出していくということかというと、市がその役割を果たしたとは思いますが、改めて一連の情報の出し方というんでしょうか、まだ金曜日には感染症の可能性は少ないという、そういうものも、ああいう世界的な権威の岡部さんのような人が、きっちりとアナウンスされたという流れはあるんですけど、その辺では情報の出し方、不安の抑え方というんでしょうか、もちろん感染症か否かというのは、まず最優先だと思うんですけど、そうじゃない可能性が出てきたときに、市民にどういうふうな、パニックにならないように情報を流すかというのは、結構行政としては今回大事なのかなと。それは評価できる部分もあるし、課題もいろいろあったと思うんですけど、一連の流れで、まだ事案が終わってないので話しにくい段階

だと思うんですけど、市長としてはどういうふうに、市民への情報提供ということだと、非常に難しいテーマだと思うんですけど。

**市長：** おそらく事案によって非常に異なることだと思うんですけども、今回のケースで言えば、一番懸念していたのは、いわゆるデマのような類いがネット上でどんどん拡散していくことによって、いわゆる間違っただけの情報や事実かのように捉えられることというのが一番悪いことですし、それを絶対に防ぎたかったということがあります。ですから、なるべく早い段階で報道機関の方々に情報提供という形で、こういうことが起きていますというのを早くやろうという方針でやってきたというふうに私は認識しています。

これをまた、どう報道していただくかというのは、いろんな見方があると思うんですが、要は一元的に正しい情報をちゃんと出していくということは、出すんですけども、どう捉えられるかというのが非常に難しいなということを改めて感じさせられた事案だと思います。ですから、それぞれの危機事象みたいなものによって、リスクコミュニケーションのとり方というのはそれぞれ違ってくるんでしょうけれども、今回も関係部局が一堂に会して情報を共有していくという体制はしっかりできていたと思いますので、そういった意味では、こういうことは満点ということはないと思いますけれども、これからもそういった正しい情報を適切に伝えていくということに努めていきたいと思っています。

**記者：** 市長、今おっしゃった、市として正しい情報は一元的に出すんだけど、どういうふうに、我々のほうだと思うんですけども、捉えられるか、ちょっと難しいな。というのは、どの辺で難しいなと感じられたんでしょうか。

**市長：** それは、文字というよりも、適切かどうかわかりませんが、映像となったときに、保護者の近くにいる人とか周辺の人たちにインタビューして、何か不安が広がっているという映像がどんどん流れますと、それを見た人たちというのがものすごい拡散力で、ある意味、全国から、何が起こっているんだというので、非常に周辺の住民の方もそうですし、あおられるということがあったのではないかと、私も幾つかの映像を見る中でそう思いました。それは非常に怖いことだなと思いましたし。

**記者：** すいません、関連なんですけれども、今おっしゃった映像で、どこの社というのは別にあれですけども、金曜日以降だったと思うんですけども、ほかの周辺の幼稚園が、僕から見るとちょっと大げさだなと思ったんですが、かなり消毒をしたり、あるいは園児を自主的に登園というんですか、ということも出ていましたけど、

現時点では、市長に入っている情報としては、その辺の周辺の幼稚園も含めて、どのように捉えていらっしゃるかと、何か聞き取りとか、そういうのはされていますでしょうかね。

**市長：** 私、直接はやっておりませんが、それこそ区だとか、あるいはこども未来局の担当がそれぞれ、幼稚園の各園とか、あるいは幼稚園協会の役員の皆さんだとかという方たちと意見交換をさせていただいていますので、その情報は上がってきていると思いますが、私も幼稚園協会の役員の何人かとお話をさせていただきましたけれども、やはりこちらが安全だと、大丈夫なんですよと言ったとしても、不安というか、何ていうんですかね、安全と安心が違うように、安心のところをどうやって担保するのかと。ただ、原因が完全に突きとめられていない段階で、どういうふうに安心までお伝えすることができるのかというのは、非常に難しいところだと思います。

ただ、これまでも言ってきたとおり、公衆衛生上、何か強毒性のあるもので蔓延していくということではないですよということをしつかりと丁寧に呼びかけてきたつもりですけれども、それがなかなか子供さんを持っている、私もそうでありますけれども、親御さんたちにとっては、どれがほんとうに安心なのかというのがわかりづらいというのは、皆さん専門家ではありませんから、難しいところだなとは思っています。

**記者：** すいません、重ねてですけれども、そうすると、終息、金曜日の段階では、そういう強毒性のものというか、強いものではないということがアナウンスされたわけなんですけど、その後の、きのう、月曜日ですけれども、から今日にかけてとか、何かその辺は、どうなんでしょうかね。

**市長：** 進展ですか。

**記者：** ええ。

**市長：** 進展は、まだ特にございません。

**記者：** というか、受けとめる側の雰囲気というか、そういうのは何か……。

**市長：** それは、冷静さを取り戻しているというのは聞いておりますけれども、それぞれの、個々の園とか個々のお子さん、親御さんたちがどう思っているのかというのは、私からはちょっと、言えるほどの情報を私自身が持っていないからあれなんですけれども。

**記者：** わかりました。

**記者：** すいません、関連ですが。今の、冷静さを取り戻しているというのは、何か受診する人が減ったとか、欠席する幼稚園生が減ったとか、そういう意味合いですか。

何をもって冷静さを取り戻したのか。

**市長：** 大分、雰囲気というか、これは数字でお見せすることができれば、それはしっかり出ると思うんですけども、ただ、雰囲気というか、そういうものは大分落ちついてきているという報告は受けています。

**記者：** あと、先ほど関係部局で早い段階から連携をとってという、これに対応して。この関係部局というのは、どういうところを指しているのでしょうか。

**市長：** 川崎区、保健所もそうですけれども、それから健康福祉局、病院局、子ども未来局、危機管理室、報道担当も含めてですけれども、それから健康安全研究所というか、それぞれの機関が一堂に会してたびたびやっていますので。

**記者：** この事案に関して、最初に一堂に会したというのは、例えば水曜日の何時ごろだったんですか。夕方ぐらい？

**市長：** あれは本会議の……、いつだったかな。ちょっと今、僕は記憶にないですけど、朝だったですかね。

**中川秘書部長：** 折り返しでいいですか。

**記者：** 折り返しでもいいです。

**市長：** はい。

**記者：** すいません、今の部分に関連してなんですけれども、川崎市は今回、基礎自治体として非常に、私は前のめりというか、いい意味で前のめりの態勢をやって、できる限りの精いっぱいのことをやられているなという印象を受けます。

ただ、私学に関しては、実は川崎市が所管しているのではなくて、神奈川県庁が所管していることになるんですけども、今回、全然県のプレゼンスが見えないんですが、市長としては、神奈川県もこの問題の対応に一定の役割を果たすべきだと思われると思うんですけども、現在、県との連携というのはどういうぐあいになっていますか。

**市長：** 最初の段階から、所管官庁が神奈川県になっているということは、もう当然全員が知っている中で、適切な情報提供はしっかりとするという形で指示はして、もう当然、その前から担当職員はやっておりました。

ただ、どう考えても、県でどうのこうのというよりも、今この地元で起きている事象に対して、所管がどうのということよりも、まず市民の健康と安全ということを考えて上での地元自治体としての取り組みですので、これは自分たちだろうという当事者意識の中でやっていましたので、特に、あの状態で県に何かといっても、なかなか

難しいだろうなという感覚はありました。ですから、そこは所管官庁と違うんじゃないかというふうに言われれば、そうかもしれないけどと、ただ当事者はうちだよねということですね。

**記者：** 市長、すいません、所管官庁が川崎市じゃないのになぜやっているんだなんていうことじゃなくて、川崎市は今回、非常によくやられていると思って、こども未来局も、別に所管されているわけではないんですけども、前のめりになって、他部局と連携して、やれることを精いっぱいやっていると思います。

ただ、本来的には、所管である県がもうちょっとかかわってきてもいいんじゃないのかなというぐあいと思うんですけども、県の動きがあまり見えないので、さっき市長が幼稚園協会の方とお話をされたという話までされていて、本来的にはそういうところに県の職員がいたりだとか、知事がいたりしてもいいんじゃないのかなと思うんですが、市長は、とりあえず今のところ、川崎市でできることを精いっぱいやっている状況で、それで県がいなくてもいいやという状況をお考えでいらっしゃるということですか。

**市長：** おそらく、これもちょっと検証しなくちゃいけないと思いますけども、どこまで求めるのか、どこまで県にというのは今後検証しますが、しっかりと。しかし、まだ事態は終わっておりませんが、発生直後からの行動からすると、あそこで県の方が来て何かをするというのは、これは酷だよねというのは正直思いました。だから、実態としては地元市がやるということになると思います。こういう危機事象のときなんかは特にですね。後で責任だ云々だとかというのは、まあ、後日検証の中でというのはあるかもしれませんが、しかし、自分たちがやっていることは、とにかく県には報告しておこうということはしておりました。

#### 《横浜市長選について》

**記者：** すいません、もう一つ。全然今までの話と関係ないんですけども、横浜市長選で、現職と、それからあと長島さんと、もしかしたら市長もお知り合いかもしれないんですけども、伊藤さんという3人が今のところ立って、三つどもえの構図になりそうな感じもします。なかなかコメントというか、所感が難しいと思うんですが、市長も市長選を控えられている身として、横浜市長選をどういうぐあいにごらんになれるか。ご出身のところであるところの民進党がまた自主投票ということになってしまっていることも含めて、市長のご所感をお聞かせください。

**市長：** きついですね。隣の町の市長選挙のことで、非常に選挙も間近ということな

ので、ちょっと、ほんとにコメントは差し控えさせていただきたいなと思います。

**記者：** 例によってお伺いしますけれども、福田市長のところには応援のオファーって来ていませんか。

**市長：** 来てないですね。

**記者：** じゃ、これは静観ですね。

**市長：** そうですね。

**記者：** じゃあ、逆に、先ほど、市長、ご自分の選挙のときに、かつての会見の中で、政策論争が健全に闘わされるのは非常にいいことだと、要するに選挙戦になるのはいいいことだとお話だったと思うんですが、そういう観点から見ると、三つどもえの戦いになって、それぞれ候補者、主張があるようなんですけれども、これは望ましい形だというぐあいにも思われているんですかね。

**市長：** そうですね。今後、だから、ほんとうにどこまで政策議論が深まるのかということは、隣町としても非常にかかわりが深いので、大いなる政策議論が深まることは期待したいとは思いますが。

**記者：** そこまでですね。

**市長：** はい、そうですね。

**幹事社：** ほか、よろしいですか。

**司会：** それでは、以上をもちまして終了いたします。ありがとうございました。

**市長：** ありがとうございました。

(以上)

---

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355